

●夢ぬちにあばれいるらし真夜覚めて腓返りの痛みをさする

市川茂子

夢ぬちに、のぬちは格助詞の「の」に名詞「うち(内)」の付いた「のうち」の音変化(したもの)(デジタル大辞泉)。腓返り(足がつること、腓はふくらはぎ)、これはコトバにできないつらさ、だ。就寝中、また運動中に起ることが多いよう。加齢も関係があるという。

歌は二区切れで、ここまでは想像でもあるところ。また機知でもある。運動中に起るイメージ(思い込み)があるということだ。めざめてしまう。歌は一つの返しでもある。

目覚めしな吐く息かそけき気持して今日の命を確かめていつ

この目覚め、でもやるせない感じが共通する。一日一日の命である。目覚めしな、はみない云い方、寝しな、の方が一般的なようだ。おわりの二首、市川さんの歌にデイサービスが登場した。これは本人。気落ちしていない。小気味いい。

気兼ねなく老醜さらし思うままデイサービスの一日を過ごす

●草叢のにはかに揺れてのそのそと茶色の小さきけもの現る

梅津純子

タイトルが「ハタネズミ」なので、この茶色の小さきけもの、もそれということになる。二首目でも、顔丸く体も丸き小さきもの、である。よくみている。ハタネズミは検索すると漢字名で畑鼠である。歌はその出現。一連のさいしょの歌でもある。

このあと、いろいろやりとりがある。ハムスター似、とか急に歯をむく、とか草に顔伏せ蹲る、とか小さき足裏赤し、とかである。

(子らの見し古き、ここがいい) 図鑑で、日本固有種のハタネズミによく似ていることを確認し、また(気が付けば)準絶滅危惧種となっていることをもしる。ネットでもしらべたようだ(八首目)。作者の結論的なものいいは、歌のとおり。そこで関心は生態というよりその(生)命になっている。

「可愛いと思う人らもいる姿」ネットの表現いささかひねる

田舎暮らし七十年に足下のハタネズミの生今日まで知らず

●長雨のあとの夏草伸び放題ブーンブーンと草刈りつづく

布宮慈子

ブーンブーン、音からは電動の草刈り機をつかっている。実家の草刈り。作業をしているのは地元シルバー人材センターの人。センターは長いので、連作では一首でシルバー人材センターをそのままつかった。

メールにて実家の草刈り依頼せり地元シルバー人材センターへ

センターは説明されていないが、当市にもあるところ。きてもらった人も、ちぢめて「シルバーさん」(この連作タイトル)。やりとりは直接のもの。作業に立ちあっているのか。剪定もたのんだ。高齢のシルバーさん(六首目)もいる。

桜桃農家だった叔母さんのところの話もある。桜桃の木をみな伐採することになったという。高齢化ということもあるが、長寿化とみることもできる。

## 前号作品短評B 〈慈子〉

● 茂吉胸像傍にしてややうしろ子が撮りくれし写真の二人

小野澤繁雄

作者は子どもさんと二人で山形県を訪れたようだ。題の「金瓶」かなかめは上山市かみのやまにあり、歌人・精神科医の斎藤茂吉の生まれ育った場所として知られている。上山といえばやはり斎藤茂吉記念館であろう。記念館の入り口近く、目立つところに茂吉の胸像がある。その少し後ろに立って写してもらった一枚。「写真の二人」は、茂吉と作者の二人である。この表現が、二人の年齢の違いや時代の移り変わり、死者と生者のコントラストまで感じさせていて秀逸だ。

町内を今歩いているこの足は昨日山寺千段を踏む

すでに自分の町に帰って歩いている場面。ふと思う。この自分の足は、きのう山寺・立石寺の石段を登った足なのだなあと。十首目、旅を客観視することで、ピタリと着地が決まった感じである。

● 打ち初めは東高野山長命寺八角堂の十一面観音

河村郁子

題は「巡拝思ひ立ちぬ」。『武蔵野三十三所観音巡礼』を本棚の下のほうに見つけたことから、

巡ってみることを思いつく。菩提寺の長命寺が最初になつていたので買い求め、そのまま何年もたつていたという。コロナ禍が三年も続くと、いいかげん家にいることにも飽きて、何か行動したい気持ちになるのも無理はない。先が見えない昨今、札所巡りは打つてつけかもしれない。内向きになりがちな心持ちをなんとか打開しようと努力している作者に好感がもてる。

般若心経の写経納めて巡りたし観音様と御目文字叶へむ

お目にかかることをいう「御目文字」は女房詞（女性語）だが、相手は観音様なのでびったりの語感である。巡礼が実現できても万一できなくても、続編を読みたいものだ。

#### ●伝説を信ずる自由芽吹山

新野祐子

「安部ヶ館山へ」と題する一連の冒頭にある句。調べてみると次のようなことがわかった。

安部ヶ館山は、山形県長井市にある標高一〇五五メートルの山。長井の五所神社には三淵の神が祀られている。平安時代末期の前九年の役（一〇五一〜一〇六二）の折、陸奥の豪族である安倍貞任は、長井を戦の要所と見て、自分の娘である卯の花姫を遣わして治めさせていた。しかし、敵将・源義家（八幡太郎義家）に恋した姫は、義家に父・貞任の要害戦略を漏らしてしまった。これによって安倍軍は総崩れになり、貞任も討ち死にした。その報を受けた卯の花姫は、己が浅はかさを悔い、三淵に身を投じて大蛇に化身した。これが「卯の花姫伝説」として語り継がれ、姫が龍神

となつて獅子へと変化していく。五所神社などの伝統神事「黒獅子舞」は龍神の化身とされている。なお、二〇一一年に長井ダムが完成したことにより、三淵溪谷は水没した。また安部ヶ館山には、安倍貞任が陸奥（岩手）から黄金を運んで埋めたという黄金伝説もあるようだ。

卯の花姫身投げし三淵ダム底に

岩手にも同じ伝説山笑う

同じく安倍一族の居城伝説のある阿部館山（標高一二二二メートル）が岩手県にある。阿部館山（安倍館山）は安倍氏の隠し砦で、砂金や財宝が埋められ、厨川柵で敗れた後に安倍貞任がここに至り、再興を誓って姿を消した（「盛岡貞任伝承」ということである。信じるもよし、信じないもよし）。